

に住んでいられるね」と言われるほどの生活環境だ。鈍感だから住み続けていられるのだろう。

しかし、ここに来て、もうこれ以上は本当にヤバイ、ほっておけない問題が10月から都内で起ころうとしている。知る人ぞ知る、廃プラスチックごみの焼却である。

長年、地球環境の保全を掲げ、みんなで努力し育てて来た分別の意義、誇りを理由はともかく世界の文化都市東京は失うのだ。40本以上ある清掃工場の煙突から、規制していないから計っていないだけの見えない

●妊婦喫煙禁止条例を急げ！

妊婦になる女性に喫煙することの危険を 実感してもらうには順序があります。

加藤一晴

浜松市（日本禁煙学会評議員／浜名医師会理事）

目を見張る台湾の 喫煙問題への取り組み

私の手許に一本の法律がある。第

一有害物質が、1年中、日夜排出され、さらに温暖化に寄与することは間違いない。感性が残っている人には、想像するだけでも息苦しいはずだ。この先、数年で住民・次世代の健康の疫学調査の数値に変化が生じた時、誰が責任を取るのだろうか。政策に従って廃プラスチックごみを混ぜて出した人の被害は自業自得ということになるのだろう。

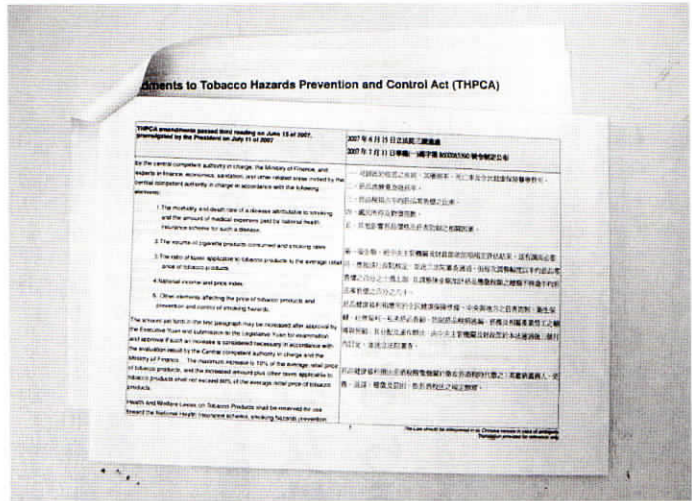
私たちは今、区長さん達が区議会にも相談せず「循環型社会形成基本法」に反するこの行為を止めさせるために「黙っていることは全てを認

めることになるのです」と、思いつく様々な手段を駆使してごみを減らし、出たごみは分別して資源化する運動を展開している。

汚染物質は次世代に母体を通じて譲り渡される。その責任を母として祖母として訴え続けているが、「パンドラの箱の底には希望という字があった」という言葉に疑問を感じる。昨今である。人類を「マン」と称している多くの男性たちも、次世代にまで及ぶ「くらしへの感性」「いのちへの感性」を研ぎ澄ましてほしいと強く願っている。

一章の総則から七章の付則まで喫煙問題についての取り決めが書かれている。どこの国のものかと言えは、台湾である。台湾の、喫煙問題への

真摯な取り組みは、アジアでも抜きん出ている。例えば、日本人がタバコ煙の付着したドーナッツを平気で食べるが、そんな光景を見て、「ど



台湾で施行されている妊婦喫煙禁止（煙害防止法）法

うしてそんな有害なものを口にできるのか？」と驚きの表情をするくらい意識の高さだ。

その他、街中にタバコの自動販売機などは見られないし、地下鉄や公共機関での喫煙者はほとんどいない。圧巻は世界初の取り組みといわれる「妊婦喫煙禁止（煙害防止法）」だ。国家が毅然として、有害なものから国民を遠ざけようとする姿

勢が素晴らしい。

2006年1月施行の同法は、2009年1月に改定され、喫煙妊婦の身元が特定された場合、約3万4000円の罰金が科せられることになった。更に販売者（5万円の罰金）や勧めた側も罰金対象になるという。

3歳未満の幼児のいる室内での喫煙も禁止され、国家を挙げて「喫煙行為」に決別しているのだ。

この斬新な規定に対し、女性団体は「女性だけを制裁の対象にすべきではない」とし、胎児の健康被害に対しては、妊婦以外の周りの人も当然罰則の対象にすべきとしている。国家が万難を排して「胎児と妊婦」を、守ろうとする意気込みなのだ。

もしこれがわが国なら、「妊婦喫煙と異常分娩との因果関係は十分な検証がなされていない」などとして、事態の本質を曖昧模稜とするだろう。そして仮に障害児が生まれたとしても、喫煙妊婦の自己責任にしてしまう。

一方、妊娠可能世代のみならず、女性全般を対象に「魅惑的なCM」を放映することで、20代〜30代の喫煙率は、微増しつつある。「自立した女性像」「洗刺とした風貌」「お洒落なライフスタイル」など、感性に訴える作戦。あるいは「琴線を鳴らす策略」が功を奏しているのだ。

大概の喫煙女性は、妊娠をキッカケに禁煙するのだが、一説では10代妊婦の40%近くは喫煙を継続しているという。喫煙妊婦が出産した場合、必ずしも障害児であるとは限らないし、あるいは一見して障害を負っているようには見えない場合もあるから、「吸っていても五体満足で生まれた」ことを、必要以上に吹聴する。この妊婦喫煙容認論調は、他のタバコから離れられない妊婦にすれば、頼もしい援軍になっているのだが、それは虚像なのだ。

胎盤からの血流低下により持続的酸素欠乏状態に陥った胎児は、押しなべて低体重である。だから「お産が楽だった」などと意味不明のコメントが聞かれるのも、今風の思想に

毒化された証拠である。有害物質にさらされる生活を、十月十日も続けていけば、ともに育つのは奇跡に近い。排気ガスの充満したガレージに、保育器を置くのと何ら変わりはない。

一般的に妊婦の喫煙で、低体重児出産のほか、子宮内発育遅延・早産・流産・周産期死亡・小児がん・乳幼児突然死亡症候群発生などの報告があるが、産まれる直前まで、両親は五体満足かどうか大変心配である。もちろん吸わない妊婦からの上記分娩異常は生まれるが、リスクの程度が桁外れに違うのだ。また妊娠中の喫煙継続により、娘の代の受胎率の低下が指摘されているのだ。

喫煙妊婦から生まれる子がADHDになる割合が高い

障害を持ったあかちゃんが産まれた時点から、不幸は「他人ごと」から「わが身」にシフトする。父親も母親も、避けられる不幸は回避せねばならない。掛けがえのない子のために、リスクは限りなく低いほうが

いいのである。

さらに、内外の研究報告によれば、喫煙妊婦から生まれる子供のADHD（注意欠陥・多動性障害）頻度が2〜3倍高いことである。受精・着床時から、有害物質を胎内に入れることで、多くの臓器障害の存在が推察される。動物実験ではあるが、受動喫煙においても多動性障害の原因になり得ることが判明している。

また最近カナダからは、母の喫煙が、娘の受胎能を3分の1に減少させることが報告された。「喫煙癖のある母親を持つ娘の受胎能が低下する」のは、これまでの疫学的研究結果が生物学的研究によっても裏付けられるものとされている。

一説によれば、現在地球上で7億人の子どもたちが受動喫煙被害に遭っているとのことであるが、その7億人の中には日本の子どもたちも含まれる。しかし残念ながら、家庭内では受動喫煙問題に関心も理解も認識もない。

東京千代田区には、自治体初の罰則付路上喫煙禁止条例がある。5年

前に初めて施行されたこの条例であるが、今では全国30箇所以上に波及している。千代田区の場合、夜間人口数万人だが、日中は100万人以上となる。公共心のない現代人らしく、歩きタバコ・ポイ捨て・空き缶の投げ捨てが横行していた。「旅の恥はかき捨て」的なメンタリティーだったのである。そこで千代田区長がリーダーシップを発揮し、制定させた罰則付き条例を立案したのは承知の通り。その判断は「マナーからルールへ、そしてマナーへ」である。だが、再びマナー領域に戻るのには難しい。

産科クリニックに喫煙容認スペースは無用

千代田区には国会議事堂もある。しかも国会の本会議は別にしても、テンプル中央に未使用の灰皿を鎮座させ、喫煙を容認している委員会もある。各委員会の判断に任せられているから、こうした現象が見られることになるのだが、米国も同じようなものである。中央政府としてタバ

コ販売は強く規制していないものの、51州中17州に厳しい喫煙規制があるのだ。

わが国もこれを真似すればよい。つまり、自治体ごとに条例制定して、前線突破するのである。そうすれば他自治体も競って、条例制定するようになるだろう。「路上喫煙禁止区域制定」や「禁煙タクシー普及」も、国家的なプロジェクトではない。危機感を募らせた地域住民のボトムアップ効果なのだ。

タバコパッケージには、「妊婦は

●環境について思うこと

新品同様に見える家電製品を粗大ゴミに
しなくてもよい工夫をしたいものです。

尾間武彦 (東京都世田谷区)

40年振りに戻った
地元の人との付き合い

定年退職して、家庭に地元で40年振りに戻りました。さあ、何をして暮らそうかな? と毎日のんびりし

喫煙をすべきではない」と記載してあり、論理的にみても阻むものは何もない。そうして条文に「産科クリニックに喫煙室は設置してはいけな

産科に設置された「喫煙室」は、妊婦喫煙の温床に繋がる懸念があり、将来の無煙世代育成を阻むものであることは、火を見るよりも明らかだ。

ていた時、ふと目に止まった区のお知らせ新聞で知り、区民講座を受講しました。

なかなか面白く質問などをさせてもらいましたが、これがご縁で少しずつ地元の方々と知り合えるように

そうしてキツカケを奪わないと、継続中の妊婦喫煙の温床になり、結果的にADHDなどが増加する。

日本人の多くは、「楽なお産」を期待しているが、小さく生んで(低体重児)大きく育てるというのでは虫が良すぎる。喫煙を続けても、元気に生まれて当たり前と思う親を少しでも減らすには、まず産科クリニックに喫煙容認スペースを造らないことからはじめるべきだろう。喫煙の危険を実感させるには、順序があるのである。

なりました。現在小さな環境NPO、定年退職後の男性だけのクラブ、など自分の「居場所」ができ、結構忙しい毎日です。

男性のクラブでは、小さな施設の草取りや庭の剪定せんてい、小学校の農園の